

2024年

アンドレア師のキリスト教美術史講座 受講ノート X

in 船橋学習センター「ガリラヤ」

from 蕨由美の Facebook

---



アンドレア師のキリスト教美術史講座

In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2024年1月17日

1月17日から船橋学習センターガリラヤでの2024年アンドレア・レンボ師の「聖書と美術の講座」が再スタート。

アンドレア司教様の叙階後初の講座でしたので、対面での講座室は満席。オンラインでも多くの方々が視聴されたようです。

まずは、昨年9月16日の司教任命発表、12月16日の司教叙階式に至るプロセスとご心境について語られ、最初は驚きと戸惑いがあったが、フィリピンでの神学校時代の恩師に「周りの人が喜んでいことこそ、聖霊の働きの現れ」と励まされ、叙階式の直前に心広い大原神父様にゆるしの秘跡をされて、式では緊張せず、心に安らぎと光りがあったこと。たいへんだったのは、心臓の弱っているイタリアのママに司教任命をどう伝えるかだったこと、など感銘深いお話しでした。

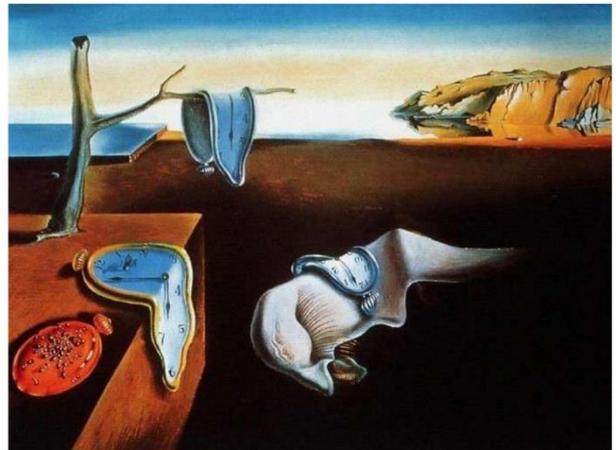


さて講座のテーマは、「サルバドール・ダリと聖書-紛らわしい世界の中にひそむ永遠の謎を発見

してみましょう-」でした。

第一次大戦後、自由な芸術的環境のパリでシュルレアリスムのグループの一員になったダリは、「偏執狂的批判的方法 (Paranoiac Critic)」と称して写実的描法で多重イメージを駆使した夢のような風景画を描く。

二つの大戦の間の一時的な希望のあった1931年の作品「記憶の固執」は、その「柔らかい時計」のモチーフで、ダリの代表作とされる。海・テーブル・古木などと3つの時計。私たちの日常性を計る時計は、また「思い出す」ということ。自由なパリでは「時間」は楽しくすぐに過ぎ去るが、ドイツやイタリアでは重く、ゆっくりと進む。



記憶の固執 (1931年)

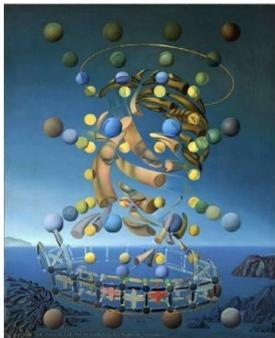
二番目の1937年の「水面に象を映す白鳥」の作品は、水面上に優雅な白鳥の姿と、水面下に鏡のように映る三頭の象が描かれる。

表は自身のバレリーナのような姿、心は重く動きも遅い象のようなものかもしれない。人生の下には何があるのか、パラノイックな発想の表現で問いかける。



水面に象を映す白鳥、Cavalière Holding, Co., Inc., Ginevra, 1937 年

1954 年の「ラファエルの最高速度の聖母」は、ルネッサンス期のラファエルの「ヒワの聖母」がもとで、穏やかで平和なラファエルの聖母の絵が、まるで洗濯機に入れられて回され爆発するイメージ。その中に、聖母のまなざしと口、そして合わされる子（イエス）の口が、母と子の関係を「思い出させる」。



The maximum speed of Raphael's Madonna (ラファエルの最高速度の聖母) 1954年



Raffaello, ヒワの聖母, ウフィツィ美術館, フィレンツェ, 1505 年~6 年

ダリは、現在・過去・未来を含めて「思い出す」ことの意味を描いている。

聖書の「思い出す」(「メモオ」ラテン語の memor) は、サンスクリット語源(smarati)に由来し、「母」そして「墓」をも意味する。

ヨハネの福音書では、イエスの言ったことの意味がその時分からなくても、弟子たちはその後の受難や復活の場面で「思い出して」その意味を理解するとの記述がある。

お墓参りなどの際に、「過去」(「母」または「死」)を思う。過去は変えられないが、聖霊の働きで「思

い出し」、そして現在の自分の解釈が生まれ、心の中に新しい光がそそがれる。

人の体は苦しみを忘れるようにできている。(「女は子供を産むとき、苦しむものだ。—しかし子供が生まれると—喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」ヨハネ 16-21)

しかし、心にトラウマがある時、あえて思い出すことが必要で、思い出すことによりトラウマを手放すことができる。イスラエルの今の戦争は、ホロコーストの体験というトラウマから解放されていない。思い出した体験を消化して自由になれば、ガザへの侵攻はありえないと気づくだろう。

シュルレアリスムのダリの絵は難解のようだったが、「見る人が自由に思うことができる」作品とのこと。

それは、アンドレア師にとっては、「memor=思い出す」であり、ヨハネ福音書の弟子たちの「思い出してわかったあらたな真実」の記述だったそうです。



2024年2月8日

2月8日は、船橋学習センターガリラヤのアンドレア司教の美術講座「サルバドール・ダリと聖書」の3回目を受講しました。



今日のテーマは、①の配布資料の「*assumpta corpuscularia lapislazulina*」(直訳は「被昇天・体・ラズベリー」)と題したダリの大作ですが、その理解のためにアンドレア司教様は、ダリと聖母マリアの作品についてのいろいろな作例と聖書の箇所を紹介されました。



Assumpta Corpuscularia Lapislazulina, Masaveu collection, Oviedo, 1952

ダリは、女性が好きで、特に妻(ガラ)はよく登場します。

シュルレアリスムの作品は、見る人の自由な解釈が大事ですが、まずはわかりやすい作例として水彩画のような2つの作品が紹介されました。

②のスライド1枚目、1950年台にブルーとライトピンク、うす茶色の3色のみで描かれた立ち姿の聖母子像は、無原罪の聖母とファティマの聖母を合わせた姿で、前へ出された左足は、蛇に頭を踏むイメージ。雲の後ろからさす日の光とイエスの光輪はルカ伝 1-26の天使のお告げに表れる聖霊の働き、背景はガリラヤ湖、うす茶色の台は創世記の土で作られたアダムとエワの子孫を表す。芸術作品というより、イコンのような「祈り」である。



③の2枚目のスライドの母子像は、伝統的なブルー=神の世界。光り輝く線は誕生の喜びと同時に、ピエタに似た構図で、天をさす復活したイエスを抱く復活の喜びもあらかず。



④の3枚目はミラノのロンダニーニのピエタ像と同じく、聖母はイエスの亡骸を支え、右手前の女性（マグダラのマリアか）が「起きなさい」を話しかけているよう。



⑤の4枚目は、無原罪の聖母と被昇天の聖母像を合わせた構図で、左上からの熱い日差しに、イエスの顔も熔けているかのよう。絵の左半分は、新しい永遠の命を示すのだろうか。



⑥の5枚目は、ユリの花で聖母マリアとわかる。真ん中に聖母の顔があり、中から外へ爆発するよう。



⑦の6枚目は、左手に本を持つポーズから「お告げのマリア」。天使の声に身体が変更されていく姿か。



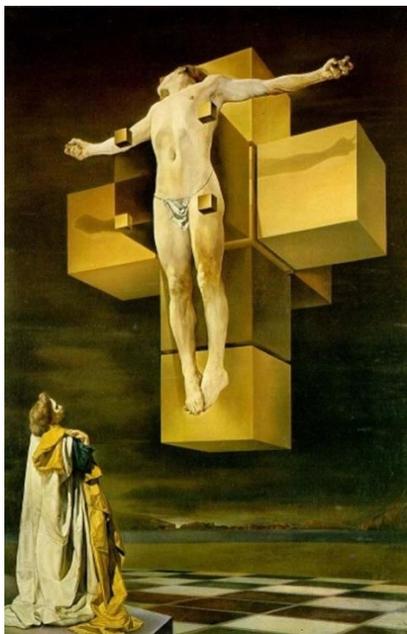
さて資料1枚目の被昇天の姿のマリア「assumpta corpuscularia lapislazulina」について、まずヨハネ伝、2-1の「カナの婚礼」、6-42「マリアの息子」、19-25「十字架下のマリア」に記されたマリアとイエスの公生活の過程を把握してみる。

この絵の視点(=神の視点)は、左上から磔刑のイエスの頭に注がれるが、照らされているのはこの世からの光。ダリの妻の顔の MARIA は手を組み祈っている。イエスの下にはテーブルクロスと燭台。「わたしは、天から降って来た生きたパンである」(ヨハネ 6-51) イエスを受け止めて、聖体の秘跡を表す。



Assumpta Corpuscularia Lapsisazulina, Masaveu collection, Oviedo, 1952

資料 2 枚目は、十字架上のイエスとその下にたずみ見上げる女性の絵。

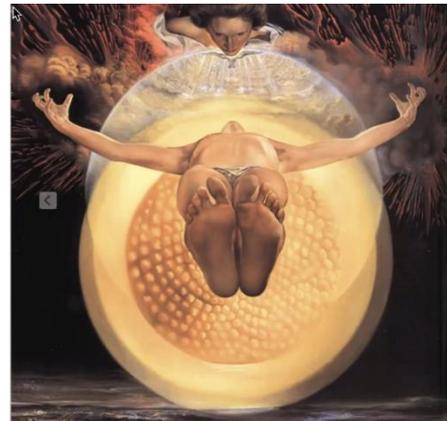


リアリスティックな表現で、重い十字架につけられたイエスの体は軽い。女性は MARIA であり、1940 年台の女性の髪形からダリの妻である。肩に

イエスの衣を負い、その姿はイエスに比べて小さく、ルネッサンスのジョットの絵などで、聖人像に対して寄進した依頼者像が小さく描かれる作法に似ている。

光は左上からイエスを、左下から MARIA の後ろ姿を照らす。その先に沈む、あるいは昇る太陽が見える。

このスライドは、7 年前にも紹介した「昇天するイエス」だが、神と聖霊、イエスの「三位一体」の図でもある。イエスの顔は見えないが、神の顔は見えている。その顔は、ダリの妻の顔であり、ダリの頭の中では、神は女性の姿、また自分の妻の姿となっている。



ダリにとっては神の顔は、自分に命の喜びを与えてくれた妻 (ガウ) しか考えられなかったのであろう。

ダリの芸術は、聖霊に導かれたのか? 私たちにはわからないが、神の見えない働き=聖霊の働きの一つとして、芸術家への導きがあることは、否めないとのことでした。



2024年3月13日

今日(3/13)は、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア司教様の講座「サルバドール・ダリと聖書」の4回目を受講。



聖週間を迎える時期なので、イエスの「十字架」がテーマでした。

聖書解説は、初心者向けにローマで書かれたマルコの福音から。

8章34では「自分の十字架を負いなさい」という弟子たちへの言葉。

14章3では高価な香油をイエスに注ぐ女性をとがめる人たちへ「わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのこと＝埋葬の準備をしてくれたことは、記念として語り伝えられるだろう」と、十字架上での死と過越しの晩餐が神秘の再現となることを予言している。

マルコの福音のイエスの死への過程では、歴史的事実の証人として、いろいろな人物が登場している。

15章21「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。」という記述では、ローマの初代教会で

その名が知られていたらしい二人の兄弟の父親シモンが証人となった。重い十字架を共に担い歩む人、社会の底辺の人々に寄りそい共に歩む人の姿に、教会の唯一の使命が語られている。

15章30~41では、正午に地が暗くなり、「神殿の垂れ幕が上から真っ二つに裂けた。」

神と人間を分ける幕を神自ら裂いて人間が神の領域に招かれたことを意味する。

十字架の下にたたずみイエスの死を見守っていたのは、多くの婦人たちで(多くの男の弟子は逃げ去り)、この時、十字架の下に「教会」が発足した。

一方、ヨハネの福音は、共観福音書と異なり難解で、そのはじめからすべてのテーマが「十字架」。

2章のカナの婚礼で、「ぶどう酒がなくなった」という母マリアにイエスが「わたしの時はまだ来ていません。」という「わたしの時」とは「十字架」の時を指している。

続けて3章で、求道者ニコデモに対し、イエスが「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」という。

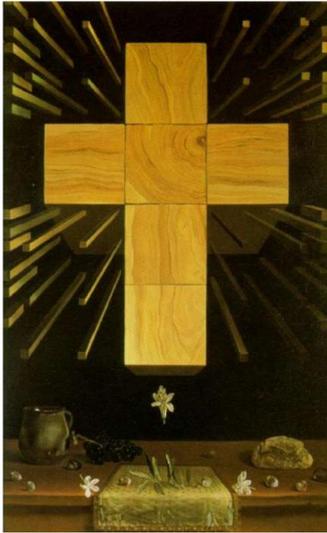
この蛇とは「民数記」の、主がモーセに言われた言葉「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」による。

そして、19章では、イエスの十字架のそばに立つマリアと婦人たちを指して、弟子に「見なさい。あなたの母です。」といい、「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。」とある。

マルコの福音が十字架の下の人々の視点からに対して、ヨハネの福音の視点は十字架上のイエスの視点から書かれている。

ダリは、1950年代に十字架をテーマにした作品を数多く残した。

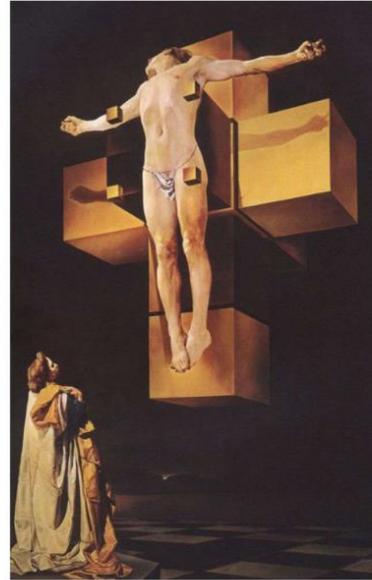
①「Arithmosophic Cross」の主人公は、背後から光りが輝く十字架。卓上の、マリアのシンボルのユリの花々は十字架の下の教会を、左右のパンとぶどう酒は最後の晩餐の印として描かれている。



Arithmosophic Cross, 1950年～1960年

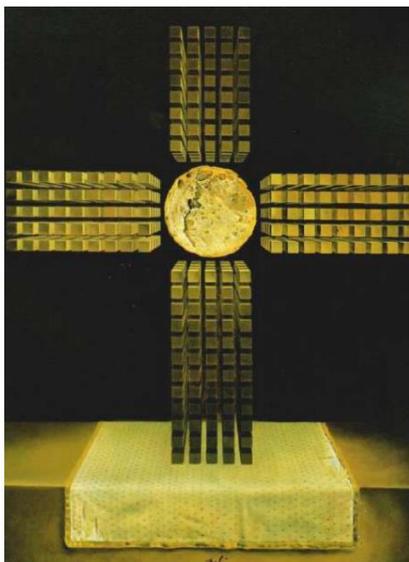
上げる。茶色のトーンにカラバッジョの影響をうかがわせる。

全地は暗くなるが、左上から神の光が注ぐ。闇の中、下の方に小さな光が「復活」を告げる。



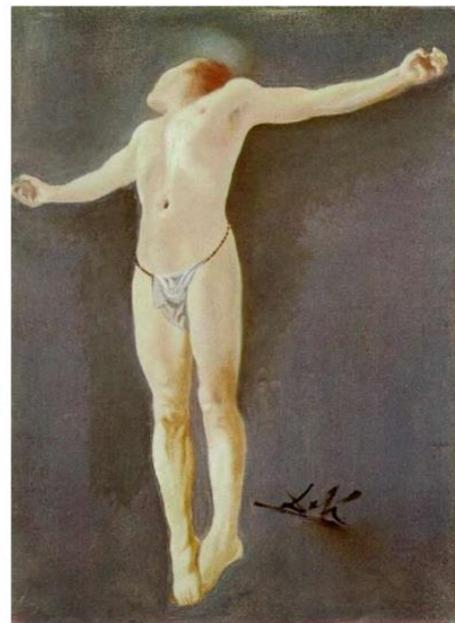
Crucifixion (Corpus Hypercubus), 1954.

②「Nuclear Cross」は、中央のパンの周りに教会の群れが集まっている。パンに当たる光、その明暗の表現は、カラバッジョ作品の研究からであろう。



Nuclear Cross, 1950年～1960年

④「Crucifixion」は、③に似たシンプルな作品。



Crucifixion, 1950年～1960年

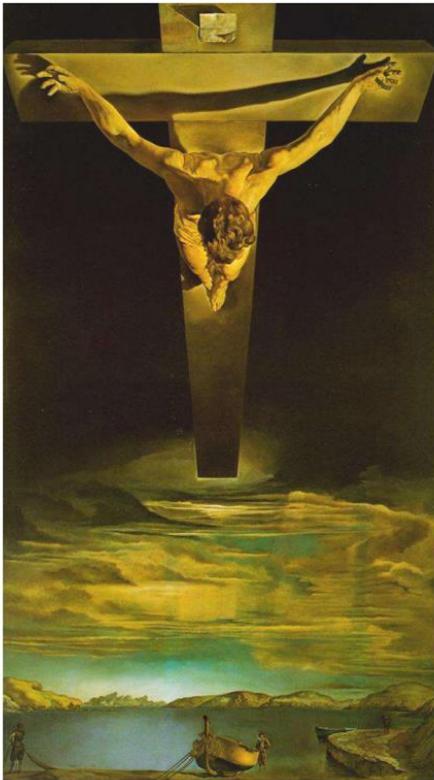
③「Crucifixion」1954は、十字架と、その下に立つマリアは肩にイエスの衣を掛け、十字架を見

⑤「Galax Christ」は、神への捧げものとしての十字架、そして、平和でのどかな地上が天とつながれて描かれている。



Galax Christ, 1950年~1960年

⑥「十字架の聖ヨハネのキリスト」1951は、聖書の記述通りの暗黒の背景に、上から十字架に照らされる光。神は息子が十字架につけられていることを見ている。十字架の下には、湖と舟、人物が描かれる。



『十字架の聖ヨハネのキリスト』ケルヴィングロブ美術館, グラスゴー, 1951

十字架は「現実」であり、「復活」は信仰。イエスがもういないガリラヤは元のとおり風景。復活は幻だったのか。夜が明けてイエスが岸に立っ

ている。その後については、私たちに任されている。

今回も、聖書とダリの作品についての素晴らしい解説に堪能しました。



2024年5月22日

今日(5/22)は午前中、船橋学習センターガリヤで、アンドレア・レンボ司教の聖書と美術講座を聴講しました。



テーマは「夢が形になる-ジャン・ロレンツィオ・ベルニーニ彫刻-」。

講座は、3月アドリミナでバチカンを訪問、教皇に謁見した際のエピソードから開始され、教皇宮殿の美術・文化財を体感し、撮影されたその画像を紹介してくださいました。(アドリミナとは、各国司教団が5年おきにローマを訪問し、教皇に謁見して各国・各教区の状況を報告するもの)

その時の情報として、大阪万博バチカン市国館で、カラバッジョの作品のほか、日本から1931年に献上された岡山聖虚の「二十六聖人肖像画」の一部が展示公開されるとのことです。



さて今回のテーマのベルニーニは、17世紀のバロック期を代表する彫刻家・建築家・画家で、「ベルニーニはローマのために生まれ、ローマはベルニーニのためにつくられた」と称賛されたそうです。このころは、古代ローマの遺跡から大理石などの石材が、新しいローマの都市建設と芸術の復興に再利用された時代でした。

サンピエトロ大聖堂は、16世紀のルネッサンス期ミケランジェロの手により聖堂本体が造営され17世紀、バロック芸術家のベルニーニに引き継がれ、祭壇の天蓋と円形広場の回廊が造られました。

今回は、ボルゲーゼ枢機卿の依頼によるベルニーニの青年期の三作品をアンドレア師が撮影した写真で鑑賞しました。

《プロセルピーナの略奪》(1621-1622年)は、ベルニーニ23歳の作品。ギリシャ・ローマ神話で、春の女神プロセルピーナと彼女を連れ去ろうとする冥界の神プルートーを描いたものです。



大理石製ですが、柔らかな肌にくい込むプルートーの手の表現は、硬い石とは思えないほど。動きを止めない二神の下の三頭の犬の表現も巧みで、360度の角度から鑑賞する彫刻は、ルネッサンス期にはないバロック期の特徴です。



《アポロとダフネ》(1624-1625年)は、ダフネが求愛するアポロンから逃れるため月桂樹に変身するシーンで、まるで「夢のような形」の造形です。

ダフネのサンダルにはハート、バレエのような動き、そして風になびく髪や指先が聖樹の葉に変わる瞬間の表現が魅力的です。



《ダヴィデ》(1623-1624年)は、旧約聖書『サムエル記』上17章を題材。「ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃った」瞬間をとらえています。



下にはサウル王が与えたが脱ぎ捨てた鎧と詩編に登場するダビデの竖琴が置かれています。



ルネッサンス期の美が静止した表現に対して、バロック期のそれは、動きの表現。

その後のベルニーニ設計のサンピエトロ広場の回廊では観衆も歩いてその作品と一体になる臨場感が特徴となっています。

2024年6月12日

船橋学習センター「ガリラヤ」で、アンドレア司教の聖書と美術の講座「夢が形になる-ベルニーニ彫刻」の2回目を受講。

この日は、アンドレア師が司祭に叙階されてちょうど20周年の日でしたので、講座の後に司教様を囲んでお祝い会を開きました。



講座では、ベルニーニ彫刻の本題の前に、アンドレア師が20年前の司祭叙階式とその前年の助祭叙階式のなつかしい写真をご披露くださいました。

助祭叙階式を受けられたのは、フィリピンのマニラ近くのタガイタイという街の教会。

タガイタイでの神学校生活について、「東京教区ニュース」第409号（2024年1月）のインタビュー記事で次のようにお話しされています。



【1995年の9月にミラノ会の神学校に入学しました。

最初の2年間はミラノ、次の1年半はアメリカ、そしてフィリピンで4年間を過ごしました。

フィリピンではマニラ近くのタガイタイという街で、ミラノ会の神学院で生活しながら、神言会の神学校に通って勉強するという生活でした。教義学の先生は現在ローマで福音宣教省の副長官を務めているアントニオ・タグレ枢機卿（当時は司祭）でした。

フィリピンでの生活は人生の節目でした。金土日は教会ではなく、スラムにある貧しい家庭に泊まって一緒に過ごすというシステムでした。同じホストファミリーに4年間通い続けるのです。最初の頃はわたしにとってはハードルが高い体験でしたが、半年ほどすると慣れてきました。

フィリピンの人々は深い信仰と信心を持っています。わたしが通っていたスラムは、大雨が降れば腰まで水があふれ、台風が来れば家が壊れるような地域です。それでも人々は笑顔を絶やさず、神様に信頼を寄せていました。これは性格ではなく信仰によるものだと思います。

イタリアでは月から金まで学校に行き、土日に教会に行くのが「流れ」になっていました。しかしフィリピンで、祈りは本当に神様とのやりとりであり、神様に助けを求めることなのだと気づきました。自分にとって信仰も日常生活も変えられる経験でした。

その後、司教になって1年目のタグレ司教（当時）から助祭叙階を受け、フィリピンで1年間助祭奉仕をした後、2004年3月にイタリアに戻り、6月に司祭叙階を受けました。】



2003年のフィリピンでの素朴な教会での助祭叙階式のアットホームな写真をスライドで見せて下さった後、場面は変わって2004年6月のミラノ大聖堂での荘厳な叙階式の写真！

叙階された司祭は26人。14世紀から19世紀まで五百年かかって建築された壮大なミラノのドゥオーモ。

その叙階式は何千人もの参列者と司教・司祭団により、4世紀のミラノ司教アンブロジウスの伝統をひくアンブロジウス典礼（ミラノ典礼）で行われ、規模も壮麗さも際立った式だったようです。





叙階 20 周年のお祝い会は、手作りのケーキの 20 本のろうそくに火が灯され、お茶で乾杯の後、和気あいの雰囲気でのしく、そして、素晴らしい宣教師を私たちに派遣して下さった神様に感謝する会になりました。



アンドレア司教の司祭叙階 20 年にちなんで助祭・司祭叙階式の思い出の写真をご披露していただいた後、美術講座「夢が形になる-ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ彫刻」を講演いただきました。



バチカンの聖ペトロ大聖堂は、4 世紀、禁教時代の初代教会のカタコンベと殉教した聖ペトロの墓を記念して創建。後に 16 世紀再建計画が立てられ、ミケランジェロの案で工事が進められ、さらに 17 世紀、ベルニーニによる内陣の装飾と、楕円形広場の構築がなされ完成しました。

聖ペトロの地下の墓を守る祭壇上の大天蓋（バルダッキーノ）はベルニーニ 1624-33 年の制作、高さ 29m のブロンズ製の巨大なもので、4 世紀の元の聖堂の鐘などの青銅材を集めて、当時最新の技術で作られたそうです。



ダイナミックに上昇のリズムを刻むねじれた柱は、旧約聖書「出エジプト記」19 章・33 章などに現れる「雲の柱」、天蓋は「臨在の幕屋」を表現しています。

雲の柱は、神が民を守るしるしとして現れ、「神の出現」を意味し、自然現象の中に神の存在が働いていることを示します。

「臨在の幕屋」は、モーセのみに「顔を合わせて語られた」場としての旧約の天幕で、新約でのイエスの誕生（ルカ 1 章）を予告しているとのこと。その神の出現は、イエスの洗礼時の鳩の形の聖霊、さらに祭壇上のご聖体であることをベルニーニのこの作品は表現しています。

幕屋のように設置された天蓋は、生きていご聖体を運ぶ御神輿のようです。



サン・ピエトロ広場も、ベルニーニの発案「信者を迎えるために、母が両腕を差し出しているかのように見せる柱廊を備えた」広場です。ルカ 15 章の「放蕩息子」を迎える父（神）の慈しみもあらわしています。多量の石材は、古代ローマの遺跡からの転用を許可されたそうです。



ルネッサンスのミケランジェロから、バロックのベルニーニを経て、聖書を題材にして完成された聖ペトロ大聖堂は、また新たな芸術を加えられていくのでしょうか。



この大聖堂と広場には、新しく彫像などの作品を置くことは禁じられていましたが、2018年フランシスコ教皇によって、船上にひしめき合う難民群像のブロンズ製のモニュメントが設置されました。カナダの彫刻家ティモシー・シュマルツ氏の「Angel Unawares」（「気づかない天使たち」の意）と題する作品で、移民の中には幼きイエスを抱いたマリアとヨゼフの聖家族もいて、それを天使が見守っています。

2024年10月16日

船橋学習センター「ガリラヤ」で、4か月ぶりにアンドレア司教様の美術講座「夢が形になるー吉安・ロレンツォ・ベルニーニ彫刻ー」が開かれ、聴講してきました。

まずは、5月のアドリミナ（各国司教団の教皇庁訪問）に続き、9月に新司教一同バチカンに集まったの研修会でローマに行かれたことの報告と、菊池大司教様の枢機卿任命のビッグニュースから。



スライドで紹介された研修会での教皇様謁見を待つ新司教団や聖ペトロ大聖堂でのミサの様子は、赤い(=殉教の血を表す)祭服が揃い感動的でした。モンゴルの小さな司教区やインド北部の政治社会的に宣教が困難な司教区なども含むアジア・アフリカ系の新司教も多くおられるとのこと。



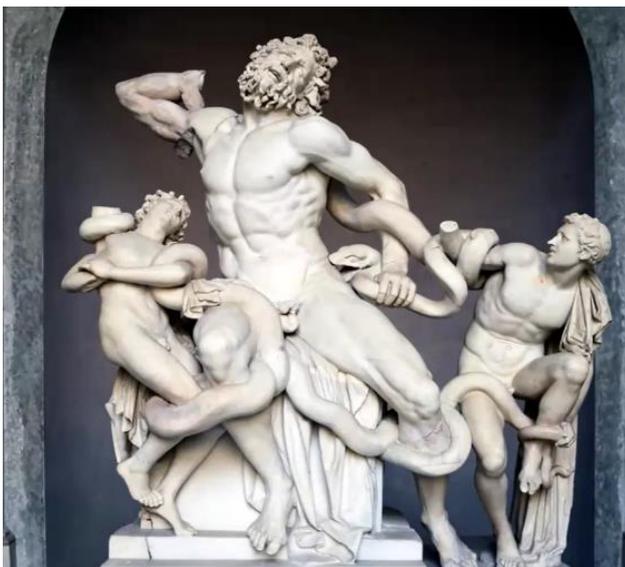
教皇様の謁見や講話での様子、菊池大司教様が新枢機卿に選ばれたことをいち早く知ったことの「秘話」など楽しい話題が尽きませんでした。

美術講座のベルニーニの作品については3回目、今日は、古代ギリシャ・ローマの彫像が15・16世紀のイタリアの彫刻家に与えた影響からスタート。

バチカン美術館蔵のベルヴェデーレのトルソ（紀元前1～2世紀）のねじれたポーズと筋肉の表現は、古典復興のきっかけとなりました。



また1506年にローマで発見されたラオコーン像もそのリアルな表現が当時話題となり、ミケランジェロのシステーナ礼拝堂壁画の「復活のイエス」像などの作品に結実しました。



ベルニーニの作品についてもこの二つの古代像が参考になるそうです。

ベルニーニの作品ではまず、「アイネイアスとアンキーセス」（1618～19年）の紹介。

先祖の遺灰に入った器を持った老父アンキーセスを担ぎ、聖火を持つ息子を伴ったアイネイアスが陥落したトロイアから脱出するという三世代の姿を表し、「命の続くこと」を象徴しています。縦長のバランスよい構図で、髪の毛の細かな表現まで彫りこんだ作品です。



「プロセルピーナの略奪」(1621～22年)は、春の女神プロセルピーナを連れ去ろうとする冥界の神プルートーをテーマに。女神の顔の涙のそこだけ彫り残すという技法にも驚きました。

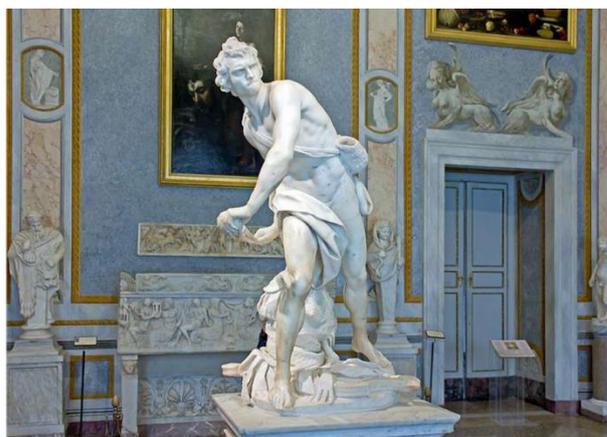


《プロセルピーナの略奪》(1621年 - 1622年)



「ダヴィデ」(1623～24年)は『サムエル記』上の、ダヴィデがゴリアテとの決闘に臨むシーンで、石を投げる直前の緊張感がすごい。

大理石の石質は良くないが、石投げのひもが黄色いのはその石の質を逆に活かしているからだそうです。



《ダヴィデ》(1623年 - 1624年)



最後に「アポロとダフネ」(1624~25年)は、アポロンと彼の求愛から逃れ月桂樹に変身するダフネの姿。石質もよく、4つの作品で一番よくできていて、舞い上がるような軽さが印象的です。



《アポロとダフネ》(1624年 - 1625年)

これらは、シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿(1576-1633)の依頼で制作された作品で、ボルゲーゼ枢機卿は当時の社会の Power Position にあった人物。教皇庁の要職を占めながら、芸術家を保護、古代ローマからの文化を豊かにしようと、神話など非キリスト教的な題材の作品も多く、ボルゲーゼ家の出身で今の同家所有のボルゲーゼ美術館にその膨大なコレクションを遺しています。

またローマの市中ではベルニーニ作の『四大河の噴水』が有名です。



最後に質問に答えて、ベルニーニは下絵のみで直接大理石に彫刻したとのこと。ひな形の制作は聖ペトロ大聖堂の天蓋のみで、さらにミケランジェロは下絵なしでの彫ったとのこと。

今の人の技術に比して、当時の精緻な技は驚くべきものであったと締めくくられました。



2024年11月20日

船橋学習センターガリラヤ主催のアンドレア・レンボ司教様の美術講座「夢が形になる-ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ彫刻」の4回目を聴講しました。

「ベルニーニはローマのために生まれ、ローマはベルニーニのためにつくられた」と賞賛されたバロック芸術の巨匠のベルニーニの作品を鑑賞します。

まずはその3つの彫刻作品の紹介から

「サン・ロンギヌス」(1638~40年)は、キリストを十字架上で刺し、その後改心したローマ兵士ロンギヌスの像で、劇的な身振りと顔の力強い表情。

聖ペトロ大聖堂のイエスの受難をあらわす4つの聖遺物(ロンギヌスの槍の穂、聖女ヘレナの聖十字架の断片、聖ヴェロニカの布、聖アンデレの頭部)を安置するバルコニーの下に配した人物像の一つとのこと。



「聖テレジアの法悦」(1647~52年)は、神秘的な法悦に包まれたアビラの聖テレジアを天使と聖人が金色の光に包まれ、舞台上の俳優のように配置されている。大理石は真っ白な極上品を使用していて、安置されているサンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会の他の彫像(バルコニーから観覧する依頼者などの世俗的な像)とは異次元の傑作とのこと。



「ノリ・メ・タンゲレ」は、ベルニーニと弟子による作品。復活したキリストがマグダラのマリアに現れ、彼に触れないように頼む場面(ヨハネ20:11~18)の像で、背景はフレスコ画、光の素材は鉄製。イエスの指先からの風?でマリアの衣がなびいています。



・バルカッチャの噴水 (1627~29 年)



・トリトンの噴水 (1642~43 年)



ベルニーニは、ローマの富豪バルベリーニ家出身の教皇ウルバヌス 8 世の依頼で、ローマの街全体を「サロット」(応接室)のような街へという大都市計画を企画実行し、その業績は今も大噴水やスペイン広場などローマの街の芸術的な遺産となっています。



・ 四大河の噴水(1648~51 年) は、ナイル川、ガンジス川、ドナウ川、ラプラタ川を象徴する四つの擬人像で、四大陸に教皇権が及ぶことの表現であったという。

これらの噴水にはバルベリーニ家の三匹の蜂の紋章があります。



クイリナーレ宮殿 (1625 年頃より改築)は、グレゴリウス 13 世のパラッツォで、今はイタリア共和国大統領官邸として儀式などに使われているとのこと。



モンテチトーリオ宮殿（1653年）は、インノケンティウス10世の依頼でベルニーニが設計、今も下院議会の建物として使用されています。



天蓋上部には、聖ペトロ=教皇の象徴である鍵とミトラ（三重冠）を持つ高さ1.5mの天使像があります。

最後に、ベルニーニがディレクターとしての作品であるバチカンの聖ペトロ大聖堂の意匠について、とても興味深い解説をしていただきました。

中央祭壇の巨大な天蓋はベルニーニの大作で、素材の大量の銅はパンテオンから運ばせたという。天蓋直下の地下に聖ペトロの古代からの墓があり、入口階段周りの99のランプもベルニーニの作。



祭壇奥には、聖霊の象徴のステンドグラス、その下に「聖ペトロの椅子」。



天蓋内側中央には鳩のモチーフ。聖霊すなわち、地上に降りてくる神の存在を表すと同時に、この天蓋は当時のプロテスタント宗教改革に対抗して「聖体」を崇める聖体顕示行列の神輿のモチーフでもあるとのこと。



これは、教会を動かしているのは、「聖霊」で、シモンペトロの信仰宣言（マタイ 16-13）「あなた（イエス）はメシア、生ける神の子」は天の父が現した神のわざであることを意味している。

「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」のイエスの言葉通り、象徴的にも、また現実としてもペトロの墓の上に「教会」が建てられていて、「あなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」の通り、特に聖年は伝統的にこのペトロの座が聖霊により罪の許される場と信仰されてきたことです。



新教皇は、地下のペトロの墓前で、教皇の印である指輪と肩にかけるパリウムを置いて祈った後、初めてのミサに臨んだとのこと。

また先日のアンドレア新司教ほか新司教の研修会の際には、各新司教が一人ずつ墓前で祈ることができたとのことでした。



ちなみに、中央のメインの祭壇で司式できるのは教皇のみ（カテドラルでもメイン祭壇を使うのは司教のみ）。ペトロの座の前の祭壇は、司式は教皇に限らないがラテン語の典礼であることが条件なのだそうです。

大聖堂の広場の楕円形の大回廊もベルニーニの設計。復活したイエスが両腕を広げてすべての人々を歓迎し包み込むことを表しています。

この広場でのミサを行うのは最近のヨハネ・パウロ 2 世のときからで、大聖堂を大きな祭壇として行われています。



最後に、ベルニーニと教皇ウルバヌス 8 世、そのスポンサーのバルベリーニ家が果たしたローマの街づくりは、パンテオンからの銅、コロシウムなど古代ローマの遺構からの大理石の持ち出しも大胆に行い、「Quod non fecerunt barbari, fecerunt Barberini」(=「蛮族がしなかったことを、バルベリーニ家がした」といわれたほどでした。

一方で、「きれいな街づくりは住む人間もきれいにする」との発想でフィレンツェに倣って行われたローマの街づくりは、400 年後の今も芸術の都として、豊かな文化遺産としての恩恵を与えてくれていますが、同時にその間の維持管理もたいへんで、近年はオーバーツーリズム対策での見学者数制限が必要となってきている時代とのことです。



---

アンドレア・レンボ司教様

2024 年、“超”お忙しい中、素晴らしい講座をありがとうございました。

来年は、2025 年ジュビリー（聖年）。

お元気でご活躍されることをお祈りします。

